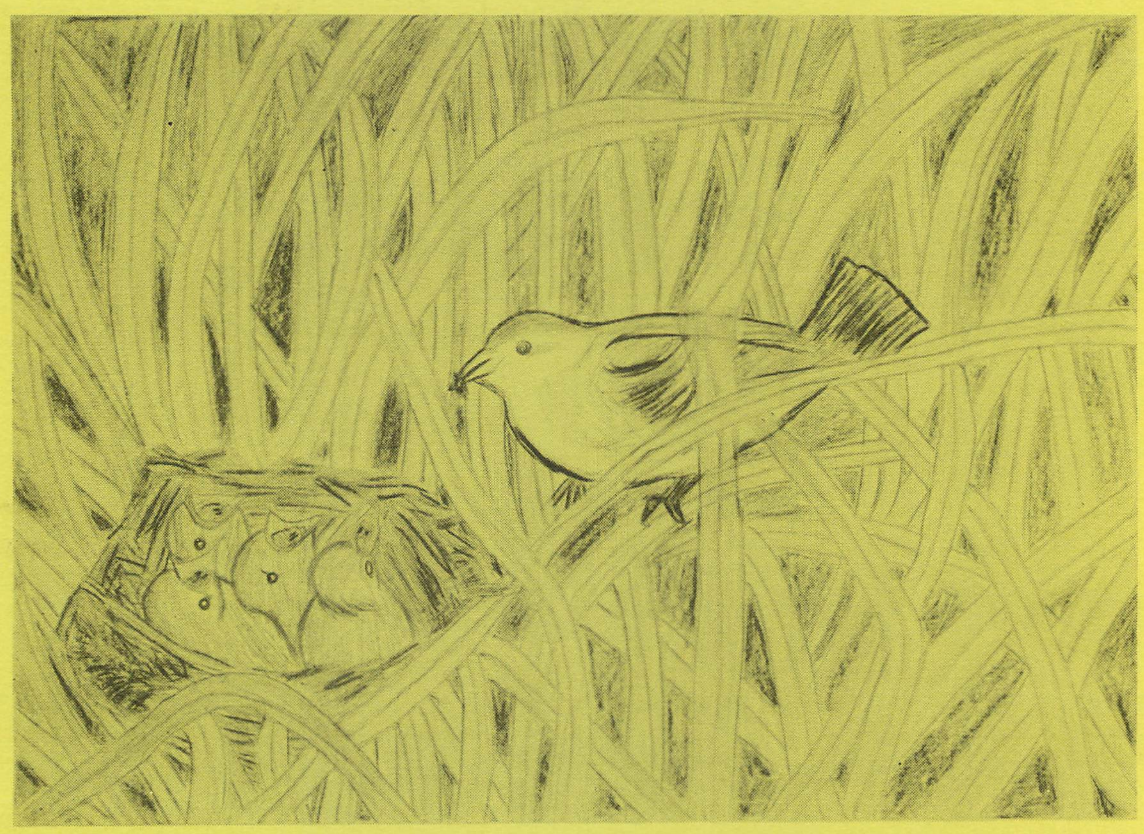
43号

愛鳥教育

1993.7

全国愛鳥教育研究会



シマセンニュウ
神奈川県秦野市立北小学校４年　伊藤美佳

愛鳥教育　No.43
1993.7

目　次

巻頭言 ---------- 江袋島吉　3
実践活動の紹介
「熊本市愛鳥教育のおいたちと活動」
---------- 田中　忠　4
「学級での愛鳥活動」 ---------- 森田真由美　6
「さぁいらっしゃい。愛鳥ブローチの
実演販売！」 ---------- 坂梨一也　8
「愛鳥活動を振り返って」 ---------- 鈴木武一　9
「１羽のカワセミから－今泉小学校の
愛鳥活動と校庭環境整備－」 ---------- 菅間　宏子　10
「愛鳥モデル校としての活動を続けて」
---------- 東京都世田谷区立二子玉川小学校　12
「自然界の一員としての鳥－身近な自然を
活かした環境教育－」 ---------- 片岡久美子　14
「「渋小　ふれあいの里」」 ---------- 野尻　一郎　16
「クラブ活動と野鳥との出合い」 -- 清田吉晴　18
インフォメーション　BOOKS ---------- 平田寛重　19
論説
「『矢ガモ』事件で考えたこと」 -- 平田寛重　20
むらの理科ことはじめ（16）
「ツバメが自殺した」 ---------- 金井郁夫　21
祝　細谷副会長連盟総裁賞を受賞 -- 江袋　島吉　22
物品販売のお知らせ ---------- 22
編集後記 ---------- 22
愛鳥クイズ ---------- 23

巻頭言

環境教育の周辺から

会長　江袋　島吉

平成元年3月に改訂された学習指導要領の大きな特色は、時代の要請に応じて地球環境の保全を進めるために、環境教育の充実を図った点にある。

文部省は環境教育の推進に資するために“環境教育指導資料”を作成、平成3年6月には中学校・高等学校編を、次いで平成4年7月には小学校編をそれぞれの学校に配布したが、新指導要領の実施が、小学校では平成4年度（中学校同5年，高校同6年）という点からすると、その順序が逆だという感じは否めない。

ところで、新指導要領の実施に入った後に、本資料に接した小学校現場では、初年度における影響はあまり無かったようで、今後の動きが注目されるところである。

一方、日本環境教育学会をはじめとする多数の論説も、それぞれ文部省の指導資料に近いものが多く、問題は学校の現場がどうこれにこたえるかにかかっている。

なお数ある論説のなかでの異色論“大人の身勝手さを押しつける環境教育”（滋賀大学教授　鈴木紀雄氏論）を紹介することとするが、その言わんとするところは次の通りである。

最近「地球にやさしい」「地球サミット」など一連の用語が不用意に使われているが「環境教育」もこれに近い。

今、主流になっている環境教育は、地球環境や都市・生活型公害を取り上げながら、幼児から地球環境にやさしい行動を身につけさせることを目指しているが、この背景には住民は日常生活の中で、環境を悪化させる加害者だという考えがあるようだ。

地球環境や地域環境に関する知識や認識を高めていくことに重点をおいた環境教育もある。

また、自然に親しむ機会を多くしながら、子供たちの自然に対する認識、愛情、感性を高めさせようとする考え方もある。

これらはいずれも重要で必要なことではあるが、これだけでは単なる「しつけ」の問題であり、理科教育、自然教育の段階に終ってしまう可能性が強い。

環境教育というからには、深刻な環境問題をもたらした根本的な原因がどこにあるのかが問われなければならない。そのためには、個別教科の寄せ集めではなく、総合的な視点に立った教科が新たに必要であろう。

人工合成化学物質が次々と開発され、多量にそれを売り込む化学工業的社会の中で、有害物質による健康被害や環境汚染を招いた。また、生態系を無視した開発工事によって、自然を次々と人工的環境に置き換えていく土木工学的社会の中で、環境の劣化、生物種の絶滅などを招いた。

こうした現代の工学的社会は、利益中心の大量生産・大量消費を基盤にした高度経済活動と結びついて発達してきた。この結果、多様で解決困難な環境問題を引き起こし、人間社会にも大きなゆがみを与えた。

子供たちはこうした社会環境の中で、幼少の時からこれに適応できるような価値観を植えつけられ、これを強いられてきた。子供たちは加害者ではなく、むしろ被害者だと言えそうだ。もし、環境問題を起こさない社会的環境が用意されれば、子供たちはほっておいてもよく育つ。

そうなると「環境教育」は子供よりも我々大人、とりわけ政治家、企業家、行政マン、科学技術者などに向けられなければならないかもしれない。

それでも子供に対して「環境教育」が必要だということは、大人に見切りをつけた結果なのかもしれない。もっとも子供たちは大人の身勝手だと怒るかも知れないが。こんなわけで環境教育という言葉は、不用意に使わないようにと自戒している。

以上、ややもすると上滑りに陥りがちな、現場教師に対する矢の声にも等しい直言である。

実践活動の紹介

熊本市愛鳥教育のおいたちと活動

熊本県熊本市立京陵中学校教諭　田中　忠

熊本市が全市を対象として愛鳥教育に取り組み始めたのは、1981年（S56）からである。当時、教師になりたての私は、指導主事から協力を要請され、手探り状態で出発した。

初年度は、小学生上学年を対象とした１泊研修観察会を金峰山において春に実施し、秋は水鳥探鳥会を行った。翌57年からは、小・中学校の教師を対象とした愛鳥教育指導者養成講習会を年に２回開催。各校代表の児童と先生方の研修が別々に展開された。その指導に当たったのは日本野鳥の会熊本県支部であるが、私が会の事務局を担当していたこともあり、若者を中心に毎週、「金曜会」を開いて計画運営を行っていた。

その後、児童対象の研修は３年目を最後に打ち切りとなった。しかし、先生方の研修は今年で11年目を迎え、「愛鳥教育研修会」と改名されて市教育委員会の主催で実施されている。

また、それと並行して、年間10校程度が愛鳥教育推進校に指定され、各校の設備充実や研修会などが行われている。おかげで公務分掌への位置づけも、小学校では100%、中学生を含めても83.3%（平成元年調べ）となっている。

しかし、担当教師となると、１～２年で代わるケースが多く、年に２回の研修ではなかなか定着するまでに至らない。

そこで、教師間の横のつながりを強めることをねらい、昭和63年に「熊本市愛鳥教育研究会」の発足をよびかけた。初年度の会員数は38名であったが、５年目の今年は81名にまで増加している。

では、ここで会の活動状況を紹介したい。

１．目的

愛鳥教育や自然教育に関する基礎知識の学習を始め、教材の開発や授業研究に努め、児童生徒の豊かな心の教育を推進する。

２．活動内容

Ⅰ．フィールドでの探鳥会
Ⅱ．野鳥についての基礎学習
Ⅲ．各校への普及広報
Ⅳ．教材の開発及び研究
Ⅴ．授業研究
Ⅵ．親睦交流活動

３．活動日

室内研修は、原則として土曜日午後２時からとし、必要に応じて変更する。野外研修は、日祭日を基本とし、必要に応じて変更する。

４．係

事務連絡・普及広報・会誌・物品管理・会計

５．年間計画（平成４年度の例）

月	日	活動内容	担当
4			
5		会員募集	田中
	8	愛鳥教育研修会（南阿蘇）	
6	20	室内研修Ⅰ（京陵中学校）	田中
		会員名簿作り	田中
7	5	探鳥会Ⅰ（水前寺公園）	橋本
	25・26	親睦探鳥会Ⅱ（産山）	森田
8		自主研修	各自
9	6	探鳥会Ⅲ（立田山）	緒方
	20	探鳥会Ⅳ（白川河口）	園田
10	11	探鳥会Ⅴ（鞍岳）	田中
	24	室内研修Ⅱ（鳥の笛作り）	前田
11	29	探鳥会Ⅵ（金峰山）	松本
		野鳥カレンダー作製	田中
12	23	親睦探鳥会Ⅶ（上江津湖）	坂梨
1		愛鳥教育研修会（鳥獣保護センター）	
2	21	探鳥会Ⅷ（西里）	松田
3	6	室内研修Ⅲ（野鳥講座Ⅰ）	田中
		まとめ・会誌作製	

6．活動の実際

活動日は月に１回程度で、本年も野外観察を中心としている。その理由は、まず会員自身が楽しみ、その素晴らしさを児童・生徒にも味わわせたいという意欲につなげたいからである。探鳥会は主に日曜日に開催しているが、全会員が一同に会することはない。それぞれに部活動などで忙しいため、毎回10名～20名程度が集まり、研修を深めている。

また、室内研修は、児童・生徒とすぐに取り組める制作活動を主とし、これまでにブローチづくりや野鳥模型、モビール、笛づくりなどを実施した。さっそく学級やクラブ活動等で取り組んでいる学校もある。

会員相互の交流をより深めるために、夏は阿蘇へ出かけての宿泊探鳥会を実施。冬は午前に江津湖で探鳥した後、冷えきった体を熱燗であたためながらの忘年会を兼ねた昼食会を開催することが恒例行事となりつつある。

このように、和気あいあいと楽しい雰囲気での研究会活動であるが、会員の中に校内研修会などの講師として活動していただける先生が４～５名生まれたことは喜ばしい限りである。

環境保全の重要性がさけばれ、環境教育としての愛鳥教育が必要であるからこそ、これからもより多くの学校で本教育が展開される助けとなれるよう、さらに仲間を増やし互いに研鑽しながら会が発展していくよう努力したいと考えている。

「ササゴイのまき餌漁」探鳥会
平成4.7.5　水前寺公園にて

野鳥とともに豊かな地球！
熊本市愛鳥教育研究会
市の鳥

学級での愛鳥活動

熊本県熊本市立向山小学校　森田　真由美

愛鳥教育という考え方に初めて深くふれたのは西小学校に赴任した時でした。ここで、探鳥会・巣箱作り・愛鳥カービング・野鳥バッチ作り・冬場の給餌活動などを行いました。何もかも初めての経験で、野鳥の図鑑調べさえ子どもに教えてもらう状態でした。その日々の中で、野鳥を通して、自分の回りの環境や生命、生態系にも目が向くようになりました。

その後、向山小学校に転勤になり、今まで学んで来たものをここの子どもたちにも知ってもらいたいと思うようになりました。４年生を受け持って、まず初めに話したのは、カラスの話でした。「みんなが、カラスと呼んでいる鳥には、いくつかの種類があります。普段は、２種類のカラスを合わせてカラスと言っていますよ。」

初めて知ったハシブトガラスとハシボソガラスの名前は、身近な野鳥に興味を持つ第一歩となりました。これは家庭の中でも話題になったようで、それから窓の外や空を見る機会が増えたという保護者の声を耳にしました。

以下、子どもたちと行った愛鳥活動を紹介させていただきます。

１．校内探鳥会

向山小学校は、熊本市街を流れる白川のすぐ近くにあります。校庭には、クスノキ、イチョウなどの大木が何本も生え、市の中心部とは思えないほど恵まれた環境にあります。

ここに、何種類もの野鳥がやってきます。朝や夕方などのちょっとした時間に校庭を回り、そこに来ている野鳥について説明します。

スズメ、ヒヨドリ、キジバト、メジロ、ハクセキレイ、ツグミ、ヒレンジャク、イカル、シメ等が見られました。

２．中庭の探鳥活動

向山小学校は、北と南の校舎の間に中庭があります。そこには、噴水のあるハス池とボケやサクラのしげみがあり、よく野鳥が来ます。どの教室からも見えるのですが、今までそれに気づいている子はいなかったようです。休み時間などに、教室の窓から見える木の枝に来ている鳥を教えると、とても興味を持って観察するようになりました。

教室の後ろに望遠鏡をすえました。自分たちで鳥を見つけて、教え合うようになりました。ヒヨドリやキジバトが、噴水のぞうの鼻の部分にとまって、水を飲んだり池で水浴びをしたりするのに気づきました。今までもきっと、同じことをしていたでしょうに、気づかなかった自分たちに驚いてしまいました。

３．紙粘土での鳥つくり

鳥に親しむ活動の一つとして、紙粘土を使っての自分のお気に入りの鳥つくりをしました。短く切った割箸を芯に、針金で足をつくり、紙粘土で体をつくります。乾かして、絵の具で色を付け、ニスを塗って出来上がりです。

せんていで切り払われた枝に、みんながつくった鳥をつけて飾りました。あきカンを芯にして作った子もいました。

４．愛鳥カルタつくり

野鳥に親しみ身近に感じるには、まず、その鳥についてよく知ることが早道です。図鑑で調べた鳥について、色や形やしぐさや鳴き声についての特徴を入れた読み札を書きます。特徴のよくあらわれた絵札を描きます。みんなのカルタを合わせてカルタ大会をします。知らず知らずのうちに、いろいろな野鳥の特徴を覚えることができます。

５．自然観察活動

校庭のどの木にどんな鳥が来たのかを調べて、校庭地図に書き込みます。これで、よく見かける鳥と、どんな鳥がどんな所に来るのかが分かってきました。また、版画板に鳥の絵と特徴を書き込んで、よく見かける木にぶら下げていきました。他の学年や先生方にも好評でした。みかんの輪切

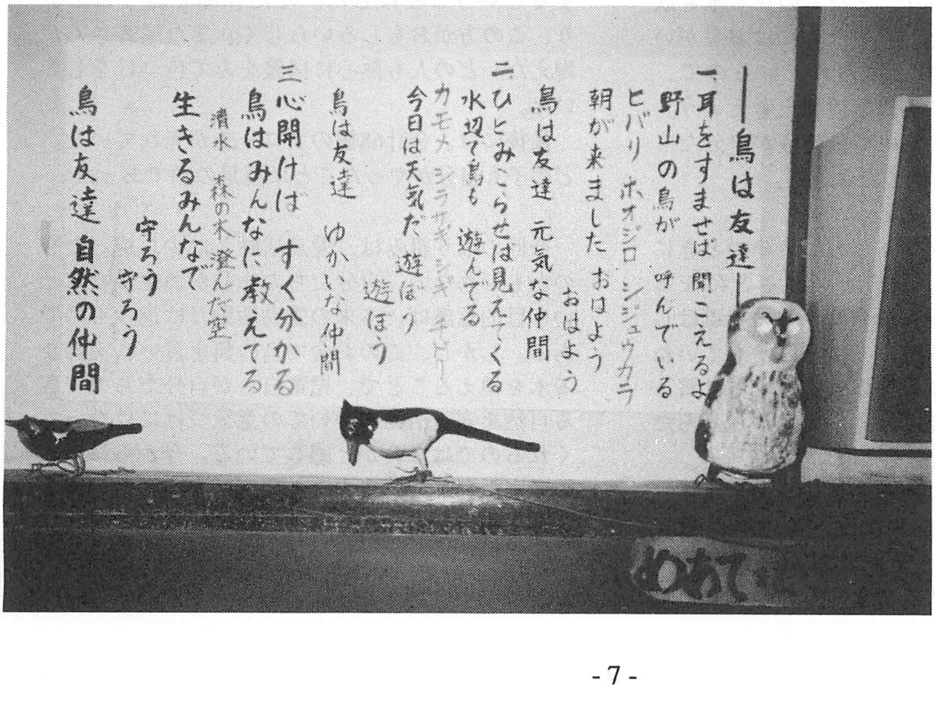
りを木にさして冬場の給餌をし、そこへ来る野鳥の観察をしています。

子どもたちは、いろいろなことを吸収するのがとても速いです。校庭に来た鳥を教えてくれるようになりました。ヒレンジャク、コゲラ、キセキレイなど、見近にたくさんの種類の鳥たちがいることに気づいていってくれています。

学校から歩いて５分ほどの白川の川原で、５種類ほどのカモとハクセキレイ等の水辺の鳥が見られます。これも近ごろ知ったことです。今まで何年も暮らしていて気づかなかったことに気づく喜びを知ったようです。

そして、鳥たちのことを知ることによって、彼らを取りまく環境についても考えるようになってきたと思います。これからも自然と鳥たちとの関わりについて学び、親しむ活動を続けていきたいと思います。

望遠鏡で中庭を観察中



学級の歌「鳥は友達」
松尾西小
教職員一同　作詞
神瀬克己　作曲
紙粘土で作った鳥たち

さぁいらっしゃい。愛鳥ブローチの実演販売！

熊本県熊本市立尾ノ上小学校　坂梨　一也

本校の愛鳥クラブは女子13名、男子２名の合計15名で発足した。どの子も「愛鳥」という言葉には興味をもっての参加ではあったが、自分たちがそのなかでどんなことをすればいいのかという意欲をもっての参加ではなかったようだ。最初の計画の話し合いのときも、私からの説明をただだまって聞くだけの活動が多かった。

早速、探鳥会をした。双眼鏡の使い方から始まって、校庭に来る鳥を見たが、スズメ、カラス（ハシブト・ハシボソ）、ヒヨドリが見られた。どの鳥も普段見慣れているとあって、児童にはあまり大きな感動はなかったようだ。なかでもモズが電線で高鳴きをしていたときだけは声を出して興味を持って見ていた。

このような活動から始まったクラブ活動を、何とか自分たちでやるという意欲をもっての活動に変えたいと考えていた。

２学期になって最初の計画で、児童から校庭に多くの珍しい鳥を呼びたいという願いが出た。それには餌付けが必要であり、また実のなる木も欲しいということになった。そのためにはお金がいるが、クラブ活動の予算は限られているので、「自分たちでお金を手に入れる活動を考えよう」ということに発展した。初めて、児童が自分たちの活動の目的意識を持ち始めたようだ。

11月にＰＴＡのバザーがあるので、そのときに小鳥のブローチ販売をしようということになった。１学期に小鳥のブローチの作り方の指導はしていた。そのとき私の予想以上にどの子もていねいに仕上げて、自分で使う分以外を先生方に買っていただき、それを資金に、迷って巣から落ちたツバメの幼鳥を育てた経験をしていた。

一応作品50個を目標に作ることにした。まず、自分が作りたい小鳥のシルエットをベニヤ板にカーボン紙で写し取り、それを私が糸鋸で切り取った。まわりを紙ヤスリでなめらかにした。最後に図鑑を見て色つけである。

こう書くと簡単なようであるが、どの子も自分の作品を買ってもらうということで、すごく緊張して作っていたようである。おかげで、すばらしい作品ばかりであった。私が不在のクラブ活動のときも、自分たちだけで熱心に作品を作っていた。自分たちの目的意識をもっての活動ができたことに全員大きな満足を感じていたようだ。

いよいよ、バザーの当日である。どの子も少し緊張してお店に並んでいた。特にクラブ長の男子は自分の役割をよく考えて早くから来ていた。「売れるかなぁ」と心配する声も聞こえた。

バザー開始と同時に50個の作品はあっという間に売り切れてしまった。お母さん方より、子供たちに人気があった。どの子も「かわいい」といってくれた。販売をしていた児童も満足そうであった。売り切れてしまっても、お母さん方を中心に「もうないの」と作品を希望する声が聞こえたので、臨時ではあったが急きょ実演販売をすることにした。クラブ員の児童が描いたシルエットを私が切り抜いて、後のヤスリや色つけは買った人がするということにした。ただ作品を買うことより、この方がおもしろいらしく、また尾客さんが増えた。どの人も熱心に図鑑をみて色つけをしていた。

最後には、合計68個のブローチが売れていた。どの子も自分がやったことに満足の顔であった。

今回の取り組みは、愛鳥活動とは少し違ったものかもしれない。自分たちの作品がお金になるという目的意識は、本来の愛鳥活動とは違うものである。しかし、このお金で鳥の餌を買い、実のなる木を植えることで、児童自らが自分たちでできる自然を守る活動についての意欲づけにはなってくれるのではないかと感じている。今からは本来の愛鳥活動への児童のより積極的な活動ができることを期待している。

愛鳥活動を振り返って

鈴木　武一

私は元愛知県蒲郡市立形原北小学校で愛鳥活動を子供と共に進めてきた者で、今は形原北小学校の親子探鳥会に招かれてお手伝いをしています。その親子探鳥会について実践してきたことを振り返り、今の考えを述べてみたいと思います。

形原北小学校が愛鳥活動を始めたのは、昭和53年でした。その当時は児童だけによる参加でしたが、昭和54年よりＰＴＡ活動の一つとして、日曜日に行う「親子探鳥会」を計画しました。「広げよう愛鳥の輪を」をスローガンに、学区の皆さんにも愛鳥活動に関心をもっていただこうと考え、各学年毎に年１回実施することにしました。探鳥コースとしては、学校周辺を中心に、学区の中で次の五つのコースを考えました。

1.**中ノ川コース**（コサギ、ノビタキ、シギ、カモ、カモメなど）
2.**岩上山コース**（モズ、カワラヒワ、シジュウカラ、メジロなど）
3.**補陀寺コース**（ヒヨドリ、ムクドリ、カワセミ、カイツブリなど）
4.**羽栗池コース**（カワセミ、カイツブリ、スズメ、ムクドリなど）
5.**こどもの国コース**（ヒヨドリ、コゲラ、カケス、ジョウビタキなど）

そして、できるだけこの五つのコースを６年間のうちにいずれかの季節で体験できるよう考えてみました。この五つのコースで、野の鳥、山の鳥、水辺の鳥、海の鳥が一応見られ、野鳥観察にはとてもよい手頃のコースだと思っています。また、これらのコースは、冬を除いて四季折々の草花や木の花などが観察でき、野鳥ばかりでなく植物の四季の変化も見られます。そのため、探鳥会の資料にも、それぞれのコースで見られる野鳥ばかりでなく植物名も入れ、探鳥会の終わりの鳥合わせの後に植物のまとめもしてきました。

このことは、野鳥と植物との関係（食べ物のつながり）を知ってもらい、ひいては自然界での動物と植物、人間とのつながりを理解し、自然保護への関心を高めてもらえたらとの考えからでした。

探鳥会を終えると、その時の感想を書いてもらい学年通信やＰＴＡ新聞などに掲載し、少しでも多くの人に関心を持ってもらおうと努力してきました。

また、探鳥会の当日が雨の場合は、室内で野鳥や植物のスライドを見せて学習したり、この辺りでは見られない野鳥の生態や自然保護についてのＶＴＲを見て興味や関心を高め、広い視野に立っての愛鳥活動ができるよう心掛けてきました。特にＶＴＲでの学習には関心が高まり、効果が上がりました。

このような「親子探鳥会」が、もう14年も続けられています。この間、開発などによりコースの変更もありましたが、中ノ川河口の養魚場には約２万羽のカモたちが越冬するようになり、冬の探鳥会を楽しくしてくれるようになりました。

このような活動を通して、今考えることは、学校教育の中での愛鳥活動には限界があるということです。年間の親子探鳥会の回数をこれ以上増やすということも難しい、となると、どうしても学校教育の中ではクラブを中心とした活動だけで、なかなか輪が広がっていかないように思います。

今、世界的に大きく自然保護が叫ばれている時、21世紀を担っていく子供達に自然の大切さを教えるためには、どうしても家庭を単位とした日常の生活の中で教育されなければならないと思います。となると、今の両親・大人達がより深く自然保護に関心を持たなければならないのではないでしょうか。それには、社会教育の場で、今叫ばれている生涯教育の一つとして、こうした自然保護の活動が盛んに行われることが望ましいように思います。その手がかりとしての愛鳥教育の役割も大きいのではないかと思われます。

今年度、蒲郡市の青年会議所が蒲郡野鳥マップを作り、小中学校や市民にも配布しました。これを機会に愛鳥活動への関心が高まることを願っています。

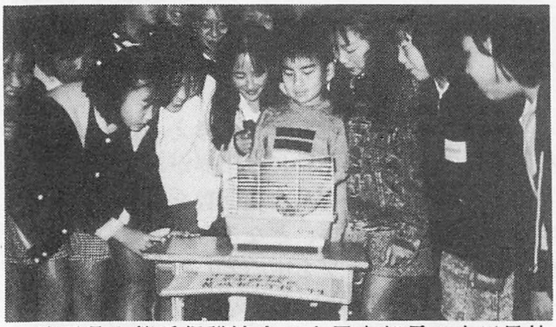
1羽のカワセミから
―今泉小学校の愛鳥活動と校庭環境整備―

埼玉県上尾市立今泉小学校　菅間　宏子

今泉小学校は、上尾市の市街地から2kmほど離れた住宅街にあります。6割の児童が公団住宅に住んでいます。

学区内の自然環境としては、わずかな農地と雑木林、そして、校庭に隣接して大手製薬会社の所有する広い雑木林があります。この森は一般解放はされていませんが、武蔵野の雑木林の本来の生態系を持ち続けています。こんな環境ですから、児童は日常的に自然に触れ合える状況にはありません。

このような状況の本校の児童、教職員に自然に目を向けるきっかけを作ってくれたのが1羽のカワセミでした。平成2年1月8日午後4時ごろ、きれいな鳥が教職員室に持ちこまれました。カワセミだったのです。



埼玉県生態系保護協会の上尾支部長の小川早枝子さんに保護をお願いし、自然に戻るまで様々な事を教えていただきました。一番近いカワセミの生息地の丸山公園から2kmも離れているのに、自分達の学校まで飛んできたということ。生の小魚でなくては食べず、丸山公園まで何回も魚取りにいき、児童は公園の池には色々な魚がいることを知りました。その子魚を小さなカワセミが毎日70～80匹も食べるといったことなど、驚くことばかりでした。

今の子は土を触りたがらず、犬猫には興味をもっても野生の動植物には関心が無いのではと思っていました。しかし、カワセミとの関わりから、そんな思いは教師の勝手な思い込みであり、怠慢であることを痛感しました。児童は興味を持っているのに大人の側がそれを封じ、応えようとしなかったのです。生命存続の基盤である生活環境がおかされている今こそ、自然界における人間の位置を考え、共存するための環境教育の必要性を感じました。ここから、今泉小学校の環境教育への模索が始まりました。

自然クラブの設立

児童の自然への関心の高まりを受けて、平成2年4月に設立しました。カワセミが存在する自然環境に目を向け、自分たちが自然に生かされている事を意識してほしいということから、こう名付けました。大量生産大量消費の社会に生まれ育った子供達に、ほんの少し前まで人間は今より自然と共に生きていたことを知ってほしいという願いもあります。

主な活動

・朝の観察会　月2回、午前7時半～8時10分
　校庭
　鳥の観察数　平成2年　31種
　　　　　　　平成3年　34種
　　　　　　　平成4年　38種
・ふれあいサンクチュアリの観察・整備
・観察池の観察・整備
・よしずつくり

今泉小学校では、児童がまず良好な自然とはどんなものかを知り、触れ合うことができるようにすることから環境教育に取り組みました。

1. 校庭のビオトープ化

除草剤の使用を取りやめ、除草を控える等。これだけでも多くの昆虫が繁殖を始め校庭で虫とりが楽しめます。

2. 観察池の活用

水生植物の植栽、メダカの放流。水生昆虫・メダカ・おたまじゃくし等が小規模ながら生態系を形成しています。児童の貴重な水遊び場ともなっています。

3. 堆肥作り

落ち葉をためる枠を校庭に5ヶ所設置。カブトムシの幼虫やミミズ等が繁殖し、児童はいろいろ楽しんでいます。堆肥はアサガオ等の栽培や学級園に利用しています。

4. 朝の観察会

毎月第1・3土曜日、午前7時半より約1時間、自由参加、主に野鳥の観察。埼玉県生態系保護協会の方の協力をえています。

5. 自然についての講話

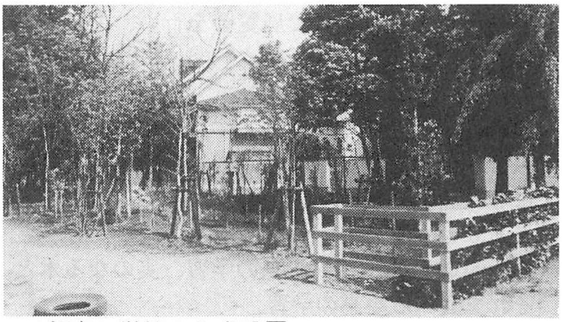
児童朝会で12月、身近な自然について。

6. 大正製薬の森での全校バードウォッチング

大正製薬のご理解をいただき、1991年から実施。12月、1クラスずつ、理科・生活科・特活。足元のふかふかの土、たくさんの落ち葉、多くの野鳥たち。児童は楽しみにしています。

7. ふれあいサンクチュアリの整備

埼玉県の事業、1992年6月完成。8月、すでにかなりの動植物が見られました。



8. 餌台・巣箱の作成設置

9. その他

休日などには自然保護団体主催の観察会などへの参加を、児童・父母に呼び掛けています。

今後の課題

校庭により多くの虫や鳥を呼び寄せ、整備することが求められています。

本校は、開校以来地域の人々の協力もあり、170種余りの樹木が植えられています。生活科のなかでの虫とりも、校庭の草地が一番多く捕れます。これは、校外に自然が減少している事でもあり、校庭のビオトープ化の重要性が増していることになります。また、地域の拠点である学校のビオトープ化は地域への波及効果が大きいのではないかと思います。

愛鳥モデル校としての活動を続けて

東京都世田谷区立二子玉川小学校

二子玉川小学校は、昭和52年3月14日、愛鳥モデル校に指定されてから活動内容が多様化し、全校で取り組むことも増えました。現在、毎年継続して取り組んでいる主な活動は次の通りです。

- 愛鳥ポスター（全校で展覧会を行い、主に5年生から数点を原画コンクールに出しています。）
- 巣箱作り（4年生が作ります。世田谷区の水とみどりの課が材料を配布してくれます。巣箱展にも出品しています。）
- ことりの文集
- 春～夏の鳥の学習、冬鳥の学習、実のなる木とそれを食べる小鳥の学習
- クラブ活動、委員会活動（野鳥園の世話、集会、ペンダント作りなど）
- ツバメの観察
- 探鳥会（夏休み早朝ファミリー探鳥会、職員探鳥会も毎年実施しています。）

1. 探鳥会

世田谷区の愛鳥モデル校の中でも恵まれているのは多摩川に歩いて15分程で行けるということでしょう。その利点を生かして、二子玉川小学校では、よく多摩川に探鳥会に行きます。

野鳥クラブでもよく行きます。短時間ですが、30分もあれば結構見られ、カルガモの親子の姿を発見したり、カワウが羽を広げて干している姿が見られたりしたことがあります。

冬鳥の観察では、各学年2時間ぐらい割り当てて探鳥会を行い、その記録を主にことり文集にのせています。パンのみみを持って行ったりすると、ユリカモメの大群と出会えたりして、子ども達は大喜びです。ウミネコ、セグロカモメが混ざっていることもあります。しかし、近年、その数も種類も減少しているのが気がかりです。

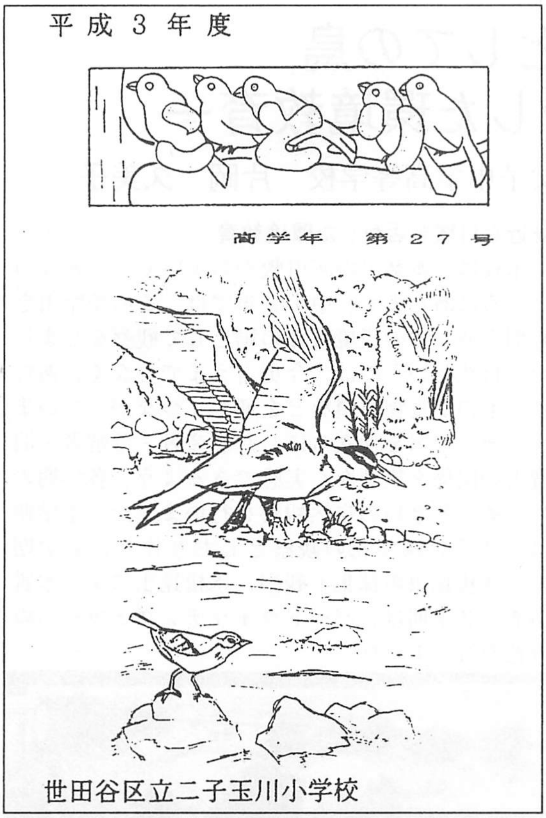
夏休みには、朝6時集合で早朝ファミリー探鳥会を実施しています。一家そろって参加する家族も多く、好評です。毎年参加してくる人もいます。夏の朝でも結構たくさん見られます。カルガモの親子、キジの夫婦、ハクセキレイ、コサギなど。カワセミが見られた年もありました。

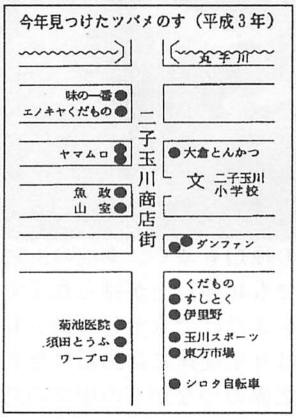
2. ツバメの観察

学校のそばの商店街にツバメの営巣状況を観察しに行きます。商店の皆さんが、とても協力してくださり、大事にかこいをして見守りながら、子ども達が見に来るのを楽しみに待っていてくださいます。ところが近年、「残念だけど今年は巣を作らなかったのよ。カラスのせいかしら。」などという声も聞かれる程、巣の数もツバメの数も減少しています。それにしてもかわいいツバメのヒナたちの大きな口が並んでいる姿を見るのは、子ども達は大好きです。

3. ことり文集

多摩川へ冬鳥の探鳥会に行った時に見た鳥の様子や思ったこと、川を見て考えたこと、自宅の庭





やベランダにえさを食べにくる小鳥たちのこと、駅に巣を作ったツバメのことなど、題材は様々です。今は年１回発行で、今年28号を出します。クラス４ページほどの割り当てですので、全員はのせられませんが、卒業するまでにはどの子も１回はのります。クラス１点「ことり文学賞」が与えられ、賞状とペンダント（委員会作成）がもらえます。表紙の絵やカットなども子どもの絵です。環境問題を扱ったり、カラスを弁護する文を書いたりする子もいます。

おわりに

毎年４年生が作る巣箱がマンションのベランダに見られることがあります。そしてヒナが入ったと報告に来る子もいます。愛鳥活動は、毎年くり返しでマンネリ化しそうですが、子どもは入れかわるので一人の子にとっては新鮮です。少しずつの積み重ねで、卒業してからも鳥に興味をもち環境問題を考える人たちに育ってくれたら…そのきっかけにでもなれば良いと思っています。

自然界の一員としての鳥
ー身近な自然を活かした環境教育ー

カリタス女子中学高等学校　片岡　久美子

はじめに

本校は、神奈川県川崎市にある私立の女子校で、1学年4クラス、6学年で約1000名の生徒が在籍しています。創立は昭和36年で、まだ30年あまりしかたっていない新しい学校です。

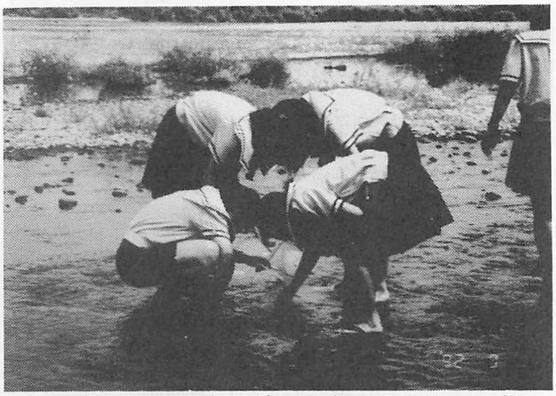
川崎市というと公害のイメージが大きいと思いますが、本校の位置する川崎市北部は、多摩川梨の産地として有名で、梨畑や田んぼ、多摩川河川敷などの2次的自然がまだ見られるところです。このような環境の中にあって、本校では、都心に近くありながら比較的のんびりした雰囲気の中で、カトリックの倫理感に基づく人間形成を軸に、外国語教育や理科教育などに力を入れた教育が行われています。

本校では、6年一貫の教育が行われ、高校1年時からは大学進学に合わせたコース別の指導が行われています。では、受験勉強一辺倒なのかというとそういう訳ではなく、理科教育の中では実験や観察が十分に行えるよう考慮されています。特に中学校では、身近な自然に触れる機会を多くとるようにしています。中学1年では校内の自然、中学2年では多摩川の自然、中学3年では生田緑地の自然を中心に、授業に野外学習を取り入れています。また、中学では無理なく理科に親しめるよう、教科で発行している教科通信（カエル通信）が、月3回程度配られます。また、全校生を対象に研修会も行われています。平成4年度は、箱根明星中学校教諭（神奈川県愛鳥教育検討会副会長）室伏友三先生に鳥の剥製の作り方を教えていただきました。

本校の生徒達は、約半数が付属の小学校から、あとは外部からの受験により入学してきます。このような生徒達は、知識としてはいろいろなことを知っているのですが、実物を見たことがなかったり、直接生物にさわるのをいやがったりする者も多くいます。ですから、なるべく理科に興味関心を抱かせるような工夫が各教師により実践されています。

身近な自然を活かした環境教育

本校は、多摩川の河川敷から歩いて7～8分のところにあります。中学2年では、この多摩川を年間を通しての環境教育の場として観察をしました。自然というのは、今更言うまでもなく、あらゆるものが食物連鎖などを通してつながっています。そこで川を仲立ちにした生産者・分解者・消費者の関係を無理なく実感できるよう、各学期のはじめに多摩川の自然観察を行いました。1学期は、土手に咲く花の観察としおり作り、2学期は、水棲昆虫の採集と観察、水棲昆虫による水質調査、3学期は、バードウォッチングとカモのぬり絵を行いました。



多摩川には、野鳥の種類も多く、本校の生物クラブが確認しただけでも40種以上が見られますから、バードウォッチングだけでも十分に得るものは多いのですが、やはり生徒達には鳥だけを意識させるのでなく、自然界のつながりの中での鳥を認識して欲しいと考え、指導計画を立てました。例えば、「トビがいる」といった場合、猛禽類だ、すごいなぁ、というだけでなく、高次消費者としてのトビに考えを及ばせ、生産者の存在にまでさかのぼってトビを見ることができるとしたら、自然感も自ずと変わってくるのではないでしょうか。このことは、ながい目で見れば環境教育に他ならないと思います。

環境教育というと何か特別のことを行っているように思われるかもしれませんが、環境教育の第

カエル通信

第139号
1992．1．18
カリタス中高理科

イヌはそのときなぜ片足をあげるのか？

実のところ．理由はどうもはっきりしないんです．ただ．片足をあげるのはオスだけでなく，四分の一のメスもそうだというのですが．犬を飼っている方．お宅のメス犬はどうですか？

ところでこの動物のオシッコやウンコは．ただ単に排泄物ということではなく．その機能は多様です．犬猫の糞尿は名刺のようなメッセージ機能を担っています．鳥類の糞爆弾のように武器ともなります．又．食用にもなります．ウサギの糞といえばコロコロしたものを思い浮かべますが，その前に食用の軟便を出していて．それを食べないと死んでしまうそうです．このオシッコとウンコの話はまだまだ続くのですが，この辺にしておいて．詳しく知りたい人はTOTO出版から出されている『イヌはそのときなぜ片足をあげるのか』今泉忠明著をお読み下さい。

1月の星ごよみ

20日 金星が太陽から東の方向に最もはなれる．宵の明星として輝く．

21日 大寒．1年中で寒さが最もきびしい時期に入る．

27日 月と金星が並ぶ。望遠鏡でみると金星は半月形をしている。

質問．カット．その他なんでもカエル通信のポストへ
片足をあげてオシッコするメス犬をご存知の方．投稿を!!

ガーン!! 世界じゅうでカエルが急激な減少

激減したのは米国（とくに西部）、カナダ．北欧，中欧のカエル。オーストラリア．コスタリカのヒキガエル。それにメキシコのサンショウオなど。そして日本のカエル。減少の原因ははっきりしない。紫外線の増加，酸性雨，農薬，ウィルス，異常気象，競争相手の出現など，いろいろ論じられてはいるが…．世界にはわかっているものだけで約3800種類（日本には39種類）のカエルがいる。今のままだと，このうち1/2ないし1/4が今後30年間に絶滅すると推定される。カエルが環境の異変を告げる早期警報を出しているのだ―と強調する生物学者たちもいる。

第27回 芦ノ湖にカモをたずねる会

とき　1月31日（日）10:00受付・10:30出航
　　　雨天の際は2月7日（日）
集合　桃源台（小田急乗船場）
解散　12時30分頃の予定
問い合せ先 箱根自然博物館 0460(2)2825
ガイド　室伏友三先生ほか（12月にカリタスで研修会の講師をして下さった方）
もち物　ノート．双眼鏡など 防寒具（手袋．マフラー）雨具．
会費　大人500円（小・中学生は200円）
◎受付は．当日集合場所で行います。

一歩は、身近な自然を感じることができるということだと考えています。現に中学2年生が1年間の観察を終えた後の感想の中には、多摩川にこんなにも生き物が生活しているとは思わなかったというものも多く見られます。

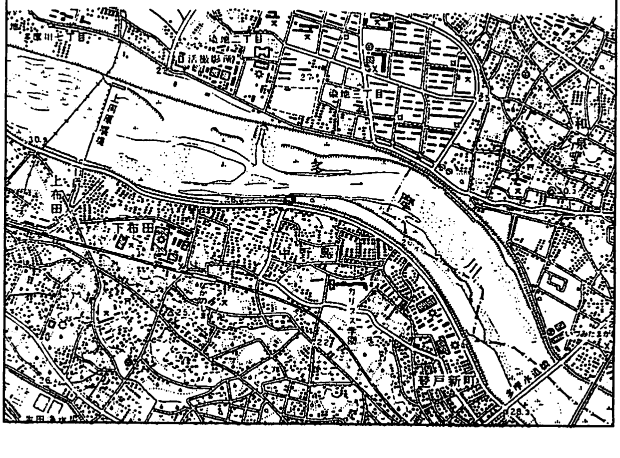
教科を中心としたもの以外では、学年としてロングホームルームを利用した多摩川クリーン作戦を行っています。これは、年間を通して多摩川の観察を行った後に、生き物たちの生活の場所である多摩川の環境整備を目的に3学期に行っています。掃除にあたっては、カモ等冬鳥が多く飛来している時期なので、大声を出さないよう、脅かさないよう指導しています。今年度は、建設省京浜工事事務所から生徒たちにゴミ袋やシャープペンシル等が届けられ、また例年ゴミ収集にあたっては多摩清掃局の方のお世話になっています。

まとめ

身近な自然「多摩川」をフィールドに、鳥を頂点とした食物連鎖の中での自然について総合的に学習を行っていますが、生徒達が鳥を鳥としてだけではなく、自然界の一員として認識していけるような指導をしていきたいと考えています。

多摩川クリーン作戦

日時：1月25日（月）　雨天の場合は2月8日（月）に延期
目的：生き物たちの生活の場である多摩川の環境整備
　　　空き缶，空き瓶，ごみなどを拾う
集合：体操服に着替えて3：00に体育館前に集合
　　　各クラス2列に並ぶ。集まったクラスより出発
場所：くるみ公園から河原におり，その地点から上河原堰堤（マラソンUターン地点）の間
注意：①野鳥をおどろかさない。大声をあげたり，石をなげたりしない。
　　　②一人では行動しない。
　　　③決められた場所以外には行かない。
　　　④ゴミは道路側，ガソリンスタンド前の信号機横（地図○のところ）に置く。
　　　⑤3：40にくるみ公園に集合。揃ったクラスより帰校。
　　　⑥防寒やけが予防の為に，マフラーや軍手を用意するとよい。



「渋小　ふれあいの里」

神奈川県秦野市立渋沢小学校　野尻　一郎

本校は、昭和59·60年度の２年間、神奈川県の委託による「ふれあい教育実践校」として研究を行った。そこで、自然や人とのふれあいを通して自然のきまりや社会のきまりを学び、生命の尊さ、生き物への親しみ思いやり、人々との連帯・福祉の心を育む「心豊かな子の育成のあり方」について実践を重ねてきた。

本年度から、小学校において新学習指導要領が完全実施となり、新教科である生活科も実施されることとなった。本校も、ふれあい教育の実践校としての成果を引き継ぎ、新しい学習内容の実践を目ざし、子供達の生活の場である学校、家庭、地域社会との連携を図り、より豊かな環境づくりに力を注いできた。その一端として挙げられるのが学校ＰＴＡ男子部会、地域住民の協力のもとに開かれた「ふれあいの里」である。

ふれあいの里は、平成３年４月から平成４年２月までかけてできた本校独自の学習園である。学校より徒歩５分、小田急渋沢駅から1.2Km程離れた渋沢丘陵のもとに開かれ、面積は、水田3400㎡、山林1200㎡を含み、約1.5haある。

使用目的は、以下のとおりである。

1.1·2年の生活科をはじめ、3·4年の理科などの学習教材園として活用する。
2.野鳥や昆虫などの観察の場として活用する。
3.巣箱をかけたりする愛鳥活動やホタルの幼虫の放流活動を通して、自然保護の精神を培う場として活用する。
4.木や草など植物を覚えたり観察したりする場として活用する。
5.地域にも開き、自然と直接ふれあう場として活用する。

地域の人々の協力で成ったこれまでの主な施設・活動は、

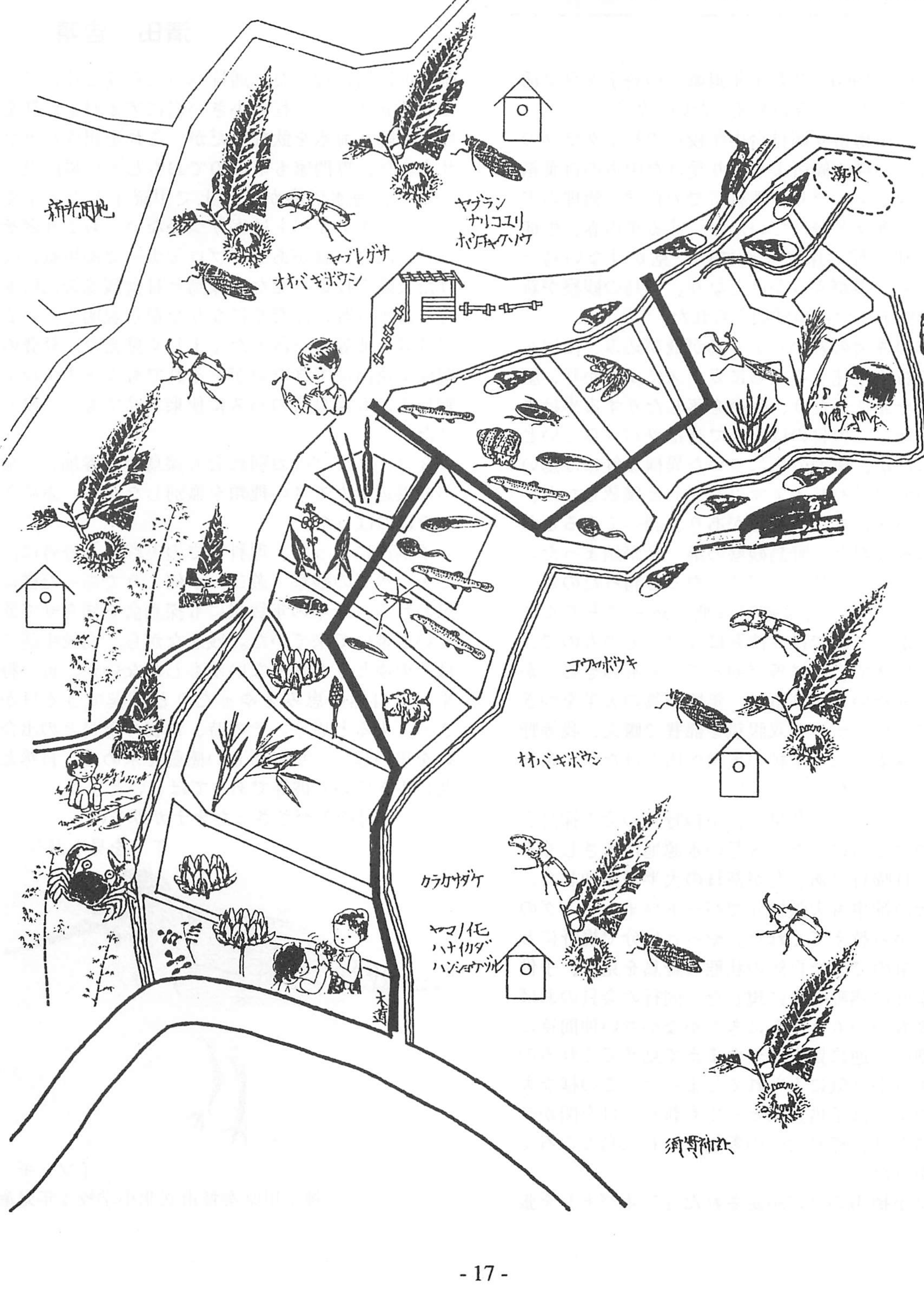
1. コゲラ・シジュウカラ用の巣箱架設（現在20個、本年度は２月７日に実施。）
2.観察や休息の施設
3.ヒノキ林の木道180m
4.ホタルの幼虫放流（津久井郡ホタル守る会、秦野市ホタル守る会より贈られたもの）
5.れんげ草の種まき
6.どじょう放流とカワニナの養育

などであるが、どれも奉仕によるものである。ホタルの放流については、県内他地域の協力で活動できたものもある。これらの施設・活動は、学習活動を行う上で励みとなり、また誇りともなっている。

現在までの観察によると、コゲラ・アカゲラ・アオゲラ・サンコウチョウ・キジバト・キジ等40数種の野鳥の姿が認められている。

遊びが変化し、自然の中で、自然を相手にどろんこになって駆け回ったり、歓声をあげ楽しく活動する経験も少なくなっていた子供達は、生活科や理科で学習の場としてのふれあいの里を訪れ、そこでいろいろな発見をして興味を持ち、友達や家族で再び来て、自然や生き物に対する親しみを深め、生き物の生態や生命の尊さを学んでいる。気軽に自然と親しむことができるふれあいの里は、十分に目的を果たしつつある。今後は、施設や活動をより充実したものにしていきたいと思っている。

湧水ふれあいの里 マップ



クラブ活動と野鳥との出合い

清田　吉晴

在職中（1990年３月定年退職）の科学クラブ活動と野鳥とのつき合いを述べたいと思う。

本校（小樽市立潮見台中学校）の科学クラブの活動は、小樽測候所より譲り受けた中古の百葉箱で気象観測をしたり、理科室での化学・物理の実験を主に細々と続けていたが、或る年の春、生徒が屋内体育館の床に死んでいた見かけない鳥を拾って来た事がきっかけとなり、野鳥の観察が新しい研究テーマにつけ加えられた。

屋体の煙突の穴からよく鳥が飛び込み、出口を求めて右往左往するうちにガラスにぶつかり、脳震とうをおこしたり、生命を落したりする事はよくあった。この日のは一目で皆はツバメらしいと判断したが、尾羽の先についた異様な針には驚いた。図鑑で「ハリオアマツバメ」と確認したが、同じツバメにも色々種類があり、調べてみるとおもしろそうだと、野鳥観察の第一歩が始まった。そのうちムクドリ、ツグミ、やっと判ったのがコムクドリの♀、と矢継早に飛び込んで来てくれた。しかしこれでは「待ちぼうけ」そのもので、やはり生きて自由に飛び回っているものをしっかり見てみたいと言う事で、年間予算の大半をつぎこんでプロミナーと双眼鏡を部費で購入、我等野鳥探検隊よろしく学校の裏山へ出かけたが、余り成果がなかった。

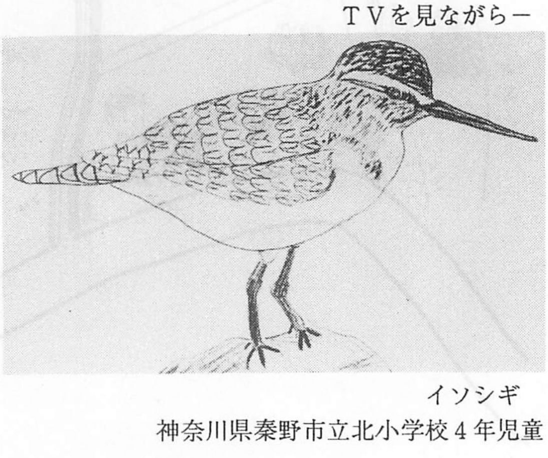
そこで、てっとり早く、小樽野鳥の会の探鳥会に参加する事にした。５月の水源地はまさしく春爛漫、日曜日であったが部員の大半が参加した。探鳥会の幹事も大張切りでバードウォッチングのＡＢＣから教えてくれた。やっと自分で視野にとらえる事のできた自然の状態の野鳥を見て、子供達は素直に感動を表に現した。同行の会員のおばさん達もいつもと違うにぎやかな小さい仲間達に目を細め、逆に昆虫等つかまえて見せてくれるので、すっかり気に入られてしまった。この様な大人との交流は子供達にとっても新しい目を開かせた事になり、探鳥会への参加は一石二鳥どころではなかった。

夏は小樽市の鳥に指定された「アオバト」を張碓の浜に見に行った、通称べったら島と呼んでいる周囲五メートル程の小さい岩にアオバトが群をなして降り海水を飲むのだが、これを狙うハヤブサもあり、専門家も来るのでおもしろい場所だ。しかし、海水浴客が岩の上で甲羅干しなどすると、さすがアオバトは寄りつかない。ちょうどその日、部分日食があり、プロミナーで画用紙に欠けた太陽を投影させた。探鳥と日食観測の同時進行。海水浴客に汗だくになりながら説明している得意気な彼等も一段とたくましく見えた。経費の関係で遠出はできないが、それでもウトナイ湖や宮島沼にも探鳥会のバスに便乗させてもらい出かけた。

３月、クラブのお別れ会も探鳥会に参加し、余市の浜辺でカモメの種類を識別しながら、おにぎりをほおばった。

子供達にとって、理科室での実験より野外に出て大自然での観察（遊び）が何よりであった様に思われる、今年の年賀状にも探鳥会を知らせて欲しいと書いて来ていた。残念ながら、高校生活ではそのゆとりが仲々ないかもしれないが、近い将来、大自然の恵みをゆったりと満喫できる日がきっと来ると思う。その時、最初の野鳥との出合いを思い起し、更に新しい感動を求めて、自然と共に生きていく彼等であってほしいと思う。

－洋弓の矢がささったオナガガモの
ＴＶを見ながら－



イソシギ
神奈川県秦野市立北小学校４年児童

インフォメーション・BOOKS

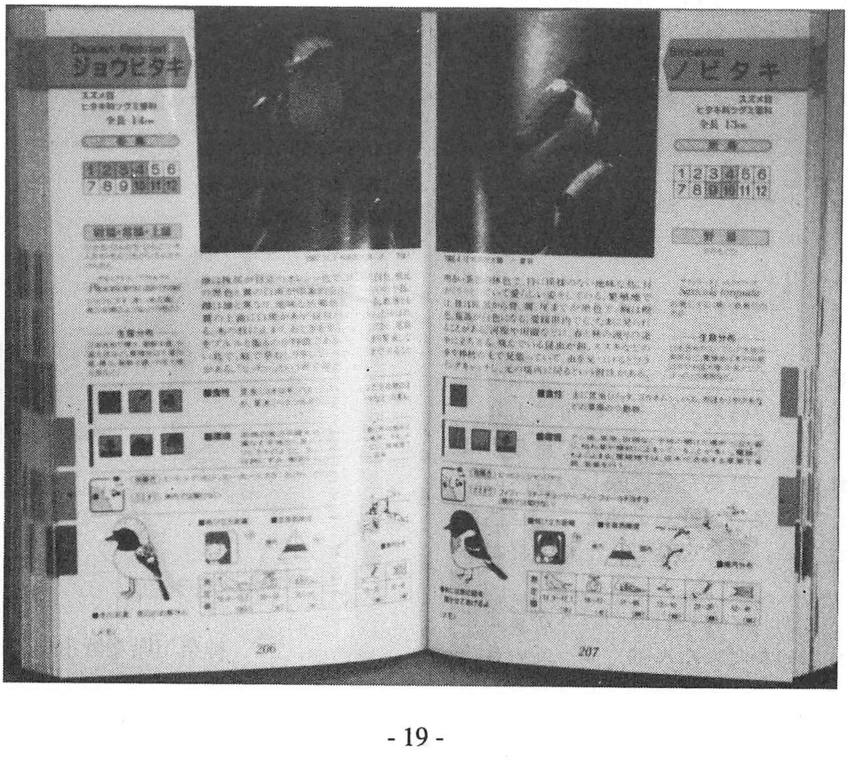
「愛媛の野鳥　観察ハンドブック　はばたき」，愛媛新聞社, 1992, 2800円

常務理事　平田　寛重

日本野鳥の会愛媛県支部が編集にあたった写真図鑑である。掲載種は愛媛県内で観察されたうちの２４５種にのぼり、新書版３８３ページに盛りだくさんの内容がぎっしり詰まった１冊である。

愛媛県の図鑑というローカルな印象を受けるが、ページをめくると、写真、種の解説（見られる時期、県内の分布、生息環境、食性、鳴き声、飛び立ち距離、体の測定値など）が図やイラストと共に分かりやすく構成されている。愛媛県人だけでなく、野鳥に関心のある人ならば、とても参考になるデータが豊富に盛り込まれている。

その他に、愛媛の探鳥地案内、声の検索早見表、俳句に登場する野鳥などの資料もある。中でも、囀りと地鳴きの鳴き声や食性、生息環境がマークと文字で解説してあるのが、野鳥を観察する際に参考になる。また、掲載種のシルエットが原寸大の薄い水色で表示されているのも、観察時には好都合である。



論説

「矢ガモ」事件で考えたこと

常務理事　平田　寛重

少し古くなってしまったが、久々のヒットを飛ばした？「矢ガモ」事件を取り上げて、野生生物とのかかわり方を考えてみよう。

そもそもこの矢ガモ事件は、東京都板橋区の石神井川で、クロスボーの矢が背中からささったメスのオナガガモが付近の住民により発見され、93年2月1日付け毎日新聞に掲載されたのが、ことの始まりであった。その後、矢ガモは、大手町のカルガモ騒動以来の大騒ぎとなり、12日に無事保護され、矢が抜かれるまで、連日のニュースとしてマスコミの話題を独占していた。これら一連の報道は、正気の沙汰とは思えない、いろいろな意味で過激な報道であった。

これは、一つには、矢が突き刺さったまま生きて生活していることが、人々の感情を刺激したと思われる。それが、マスコミの報道との相乗効果により、騒ぎはエスカレートしていった。

このバカ騒ぎを聞きながら、全国で年間約70万羽（90年度）ものカモが狩猟や有害鳥駆除という名目で正々堂々と殺されていく事実が、私の頭から離れなかった。自然や野生生物に対する認識の不足が、本当のことを見えにくくさせてしまっていると思わざるを得なかった。

近年、マスコミの影響で、野鳥に関心を持つ人たちが増えてきている。たいへん結構なことなのだが、ブームというか、うわべだけの情報でその気になってしまいがちの人が多いように思われる。

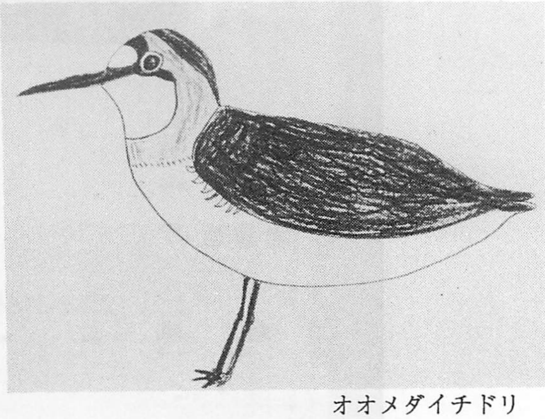
中には、野鳥を守ろうということで、1年中餌を与え続ける人たちがいる。餌をやる事により、確かに労せずして、窓越しに鳥を間近で見る事はできるが、それでは、野鳥たちの厳しい自然の中での生活は見えてこない。野鳥を通して、自然を見ることはできない。野鳥を見て、それで終わってしまう。

野鳥をペットと同じように自分の言うがままにさせたいという思いがだんだん強くなっていき、本当のつきあい方が見えなくなってしまうのではないか。

野鳥保護にかかわる人たちの努力によって、野鳥と人々の距離が少しずつ縮まっているように感じられるが、その裏には、溺愛するようなつきあい方を生んだり、その命を奪う事に喜びを見いだす人たちがいることも忘れてはならないことを示す事件ではあった。

私たちは、教育にかかわる者として、節度ある野生動物とのつきあい方を、感性と自然認識の両面で育てていかなければならない。

感性は、自然の中で過ごす事により培っていき、自然の理解のためには、幼児の頃から、科学の裏付けによるきちんとした野外生物学を普及させていかなければ、いつまでも大人になれない人間、本物を見失ってしまう人間を育てることに終始してしまうのではないだろうか。



オオメダイチドリ
神奈川県秦野市立北小学校4年児童

村の理科ことはじめ（16）
ツバメが自殺した

副会長　金井　郁夫

私が登校するのを待っていた伍作が駆け寄って来て「先生、これみろおっ。」「何だツバメか、どうして死んだんだ。」「それがよぉ、自殺したんだぜ。」にはこっちもびっくりである。「ええっ、そんなことあるのかよ。」「うそじゃあねえぜ。」「そうか、そりゃあ大事件だ。その時の様子を１時間めの授業の時、皆にも聞かせてやろう。」と云いながら手を出しツバメの死体を受取ると、首の骨が折れているらしく頭がぶらぶらしている。

職員打合せが終り、さきほど受取ったツバメの死体を持って２Ｂの教室へと急ぐ。挨拶が終ったところでさきほどのツバメ持ちあげて、「このツバメは伍作が言うには自殺したらしいんだ。」には、たちまち、「うそだ。」「鳥が自殺すんのかよ。」「伍作おめぇが殺したんじゃあねぇのか。」等の発言がとび出す。すかさず、「おらぁ、ホオジロやスズメは殺したけんど、ツバメなんか殺さねぇぞ。」と言い返したのは伍作である。そこで、「そうだな、伍作は小河内村以来の習慣で冬にスズメやホオジロを捕ることはあっても、春や夏には鳥採りはやらねぇよな。」と助け舟を出す。伍作は、そうだと言わんばかりにうなずく。そこで、「で伍作、このツバメはどうやって自殺したんだか、皆に話してやんな。」に立ち上がり、「きのう（昨日）俺が八王子へ行っての帰り、長沼駅前の通りを歩いていたら、平山の方へ向って自転車を走らせてたおじさんの前の輪っかにツバメが飛びこんだのよ。そしたら半回転ぐらいして、そいつが地べたに落っこったまんま動かなくなっちゃったんだ。」「おじさんはどうした。」「知らねぇふりして行っちゃったよぉ。」「本当に知らなかったのかな。」「知ってても死んだ物はしょうがねぇと思って走ってったんだな。」「益鳥を殺したと思ってきまりがわるくて行っちゃったんだかも。」は、村では物識りの忍田である。

とかく質問くせのある祐二が、「そのツバメは本当に自殺したのかなぁ。」と頭をかたむける。「先生どうなんだ。」とほこ先をこっちに向けてきたのは、少しばかりこうるさい塚本である。「そうよなぁ、本当のところは…」で話を止めて皆を見まわすと、ひょうきんな中西が「鳥に聞いてみなくちゃあ判らねぇ。」とやる。皆思わず（にが）笑いだしてしまった。「事実はその通りなんだが、このツバメはなぜスポークにからまるほど低く飛んだのかなぁ。」と問いかける。「そりゃぁきのう天気が悪かったせいじゃねえの、うちの死んだおじぃさんがよく言ってたぜぇ、ツバメが低く飛ぶとやがて雨が降るから田んぼに水が入れられる、てなあ。」「あっそうか、そう言えば田代んちのおじぃさんは去年なくなったんだっけなぁ。年寄りの智恵ってのはこのことなんだ。」すかさず塚本が、「天気が悪くなるとツバメはなんで低くとぶのかな。」には、「それは餌の問題だと思うよ。雨の降る前、空中の水分が多くなると虫たちの羽がしめって重くなり、高い所をスイスイと飛べなくなり、低いあたりをヨタヨタと飛んでるからツバメも低く飛ぶ。そこでうっかりしてそそっかしいツバメがスポークに巻きこまれたんだろうな。」と結ぶ。

「それはそうとして、ツバメの餌はどんな虫なんだ。まさかカミキリやカブトは食えめぇ、コガネムシもむりかなぁ。」と忍田がつぶやき、しばらくは沈黙が続く。そこで、「これは大事なことだな。誰か知ってる者、あるいは気が付いた人はいねぇか。」には中西がおずおずと、「そう言えばうちの軒下にあるツバメの巣の下に死んだトンボが落ちてたことあったなぁ。あれは親が持ってきた餌を子が受けそこなったんだなぁ。」「あんなでけえ物もツバメの子は食えんかなぁ。」と祐二は頭をかたむける。再び中西、「トンボは３匹いたからたぶんまちげぇねぇと思うよ。」そこで、「おい忠、おめぇんとこのツバメはその時どのくらいに育ってた。」「下から見ると親と同じくらいにでかくて、餌を持って親が来た時、５匹がせり出すと巣からこぼれそうになってたぞ。」「そうか、するとかえってから17～18日になってんなぁ。じゃあトンボぐらいの虫も食うかもしれねぇなぁ。」「とすりゃあ、かえったばかりの子はそれなりに小せぇ虫を食うんだべな。」と塚本発言。「これはおもしろいテーマになりそうだ。皆これからツバメの巣を見たら下に虫が落ちてねぇかよく見て、もしあったら拾ってきてくれ。しばらくはツバメの餌しらべをやるからな。」でツバメ談は終りとする。

祝　細谷副会長連盟総裁賞を受賞

会長　江袋　島吉

本年度の“第47回愛鳥週間・全国野鳥保護のつどい”は、去る5月9日、新緑の映える京都府丹波市の自然運動公園で挙行されたが、この席上で、長らく本会の副会長としてご尽力を頂いている細谷賢明先生には、最高の栄誉に輝やく財団法人・日本鳥類保護連盟総裁賞を、総裁常陸宮殿下より親しく授与されました。誠に芽出たく心からお祝いを申し上げます。

細谷先生は鳥取県気高郡気高町のご出身で、幼少の頃より自然に親しみ、理科学習特に野生生物に対して格別の興味と関心を示されました。

昭和22年に中学校教諭となって以来、勤務校に野鳥クラブや生物クラブを設立し、生徒に対して、身近な野鳥の観察調査や鳥獣保護についての調査を継続させ、全日本科学研究発表大会や、全国鳥獣保護実績発表大会などにその成果を発表し、各種の賞を受けてこられました。

昭和55年からは、山階鳥類研究所の標識調査協力員及び日本鳥類保護連盟の専門委員として、鳥類の研究・保護に専念されました。

また、昭和55年に発足した全国愛鳥教育研究会には、設立当初より副会長として、現在までの13年間、全国の愛鳥モデル校を拠点に、学校教育における愛鳥思想、野鳥保護活動の啓発推進に尽力されました。

その間、愛鳥教育国際交流会議に積極的に参加され、昭和62年には中国の江蘇省、昭和63年にはネパール視察団の一員として活躍、多大の成果を挙げられました。

平成4年5月には、県内の有志と共に“日本野鳥の会鳥取支部”を結成し、野鳥の愛護・自然保護の諸活動を展開され、今日に至っています。

以上が先生の賞詞の概要ですが、今後ともますますご健勝にてご活躍のほどを望んでやみません。

物品販売のお知らせ

前号の特別付録「身近な野鳥」の販売を始めました。

価格は、1部150円（〒料込）です。発送の都合上、10部単位で承っています。

早速、東京都世田谷区水とみどりの課様をはじめとして、会員の方々からも大量にご注文をいただいております。授業の教材として、また、地域でのバードウォッチングの指導の際に、どうぞご利用ください。

詳しくは、事務局（増田）までお問い合わせください。

編集後記

長らくお待たせしてしまいましたが、ようやく43号の発行にこぎつけました。

本号は、全国各地で愛鳥教育に活躍してくださっている方々に、その実践の様子を報告していただいたものです。

愛鳥教育の意義やその特性、具体的な実践の方法、現在の愛鳥教育の抱える問題点などについて、様々な角度から、ご報告をいただきました。ありがとうございました。　（杉田）

愛鳥教育 No.43
平成5(1993)年7月31日

発行人	江袋島吉
発行所	全国愛鳥教育研究会
住　所	〒162 東京都新宿区弁天町1番地 三河屋ビル3F （財）日本鳥類保護連盟内
電　話	03－3205－7861
FAX	03－3205－7863
会　費	3,000円
郵便振替	東京8－12442
印刷所	祐　文　社

愛鳥クイズ

【前回の解答】

1.スズメの体重は、500円玉より、軽いか、重いか？

A.重い

解説：1羽のスズメの重さは、だいたい25グラム前後です。500円玉は、1個6グラムぐらいです。
・あなたも、死体を見つけたら、測ってみましょう。

2.ホオジロの羽の数は、次のうちのどれでしょうか？

A.③約3000枚

解説：ある人が、拾った死体の羽を数えたところ、2763枚だったそうです。
・あなたも、羽の抜け落ちていない新しい死体を拾ったら、一つ一つとって糊で画用紙などに貼り付けてみましょう。
・拾った死体でも、鳥のことを知るための大事な学習ができます。

参考文献：平塚博物館「野鳥入門」1989

【今回の問題】

仲間はずれをさがしましょう。4種の鳥の中の1種が他の3種と何かが違っています。さあ、野外に出て、その違いを探してみましょう。

例：ハクセキレイ・ムクドリ・ヒヨドリ・キセキレイ
上記の4種では、ムクドリが仲間はずれです。理由は、飛び方の違いです。ヒヨドリとハクセキレイとキセキレイは波型に飛びますが、ムクドリは、直線的に飛ぶからです。

1.シジュウカラ・カワラヒワ・メジロ・スズメ　（尾羽のかたちがポイント）

2.ホオジロ・ヒバリ・クロジ・カシラダカ　（尾羽の色ががポイント）

3.コゲラ・カッコウ・アオバズク・キジバト　（足指の付き方がポイント）

4.コサギ・アマサギ・アオサギ・ダイサギ　（足指の色がポイント）